

■ろう者と聴者が遭遇する舞台作品「黙るな 動け 呼吸しろ」について

公演概要

作品タイトル：TOKYO FORWARD 2025 文化プログラム ろう者と聴者が遭遇する舞台作品「黙るな 動け 呼吸しろ」

公演日：2025年11月29日（土曜）

会場：東京文化会館 大ホール

プロジェクト概要：ろう者と聴者、それぞれ言語、生活環境の異なる表現者たちが出会い、前代未聞の舞台制作へと挑みます。

※作品の詳細については、後日発表予定。

主催：東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、国立大学法人東京藝術大学

公式サイト：<https://duk-tokyoforward2025.jp/>

公式YouTube：<https://www.youtube.com/@duk-tokyoforward2025/>

公式Instagram：https://www.instagram.com/duk_tokyoforward2025/

制作コアメンバーについて

本作品への意気込みなどメッセージをいただきました。



総合監修

日比野 克彦（ひびの かつひこ）

■プロフィール

1958年岐阜県生まれ。

東京藝術大学に在学していた80年代前半より作家活動を開始し、社会メディアとアート活動を融合する表現領域の拡大に大きな注目を集める。その後はシドニー・ビエンナーレ、ヴェネチア・ビエンナーレにも参加するなど、国内外で個展・グループ展、領域を横断する多彩な活動を展開。

また地域の場の特性を生かしたワークショップ、アートプロジェクトを継続的に発信。現在、岐阜県美術館、熊本市現代美術館にて館長、母校である東京藝術大学にて1995年から教育研究活動、2022年から学長を務め、芸術未来研究場を立ち上げ、現代に於けるアートの更なる可能性を追求し、企業、自治体との連携なども積極的に行い、「アートは生きる力」を研究、実践し続けている。

<メッセージ>

僕は、7年前に初めて「ろう文化」というものがあると牧原さんから聞いて、何それ？って知るところから始まりました。

世の中に障害者やハンディ等の言い方があり、オリンピックにもパラリンピックがありますが、そういうものではなくて、例えばヨーロッパ的な文化やアジア的な文化など、様々な地域文化があるけれども、それと同じように「ろう文化」というのがあるということを知り、ぜひ「TOKYO FORWARD 2025 文化プログラム」の中で発信していきたいと思い、スタートしました。

いまミーティングを重ねている真っ最中なんですけれども、本当に気づきが多いミーティングばかりです。

例えば、単純に台本は必要だね、音響があるよねという前提でいると、これはやはり聴者の世界のデフォルトなんです。

ろう者からしてみると台本や声を出して本読みをしましょうということが適わない、音響も振動はあるけども音って何？というところから始まるので、そこでじゃあ、どう表現していくのか等、根本的な部分から話し合っています。

文化というのは、歴史が証明するように、違う価値観を持った人が川のほとりに集まってきて、そこから文化や文明というものが生まれてきます。だから、違う価値観を持っているということは、これはお互いにとっても次への気づきを教えてくれる、示唆してくれる大きな大きな宝物なんです。なので、これがただ単なるエンターテインメントや表現のプログラムではなくて、本当に今社会が求めている多様な社会を築いていこうという時にエポックになるような、そんな舞台というか、観客含めて体験できる時空間というものにしていきたいなと思っています。

ステージは一回公演ですけども、我々のビジョンとしては世界中どの地域にも、ろう者も聴者もいますから、国内にとどまらず海外でも、中学生や高校生が、「うちの地域でもそれを再演したい！」とやっていただけるように、またろう学校の子もたちと聴者の子もたちとの交流プログラムとしてやってみたいなど、今後再演性のあるものに仕立てていきたいと思っています。

そういったものにするべく、今みんなで頑張っているところです。

楽しみにしててください。



(C) 池田宏

構成・演出

牧原 依里 (まきはら えり)

■プロフィール

作品形態は映像、パフォーマンスなど多様だが、その作品から生まれる現象を可視化する装置を提供することで、私たちの共通性と相違性を探り続けるとともにこの世界の社会構造を浮かび上がらせる試みを行なっている。

映画作品にろう者の「音楽」をテーマにしたアート・ドキュメンタリー映画『LISTEN リッスン』(2016)を零境 (DAKEI) と共同監督、第20回文化庁メディア芸術祭 アート部門 審査員推薦作品、第71回毎日映画コンクール ドキュメンタリー映画賞ノミネート。他『田中家』(2022)、演劇作品に『聴者を演じるということ 序論』(2023)等。恵比寿映像祭2025 コミッション・プロジェクト ファイナリストに選出。株式会社博報堂DYアイ・オー フェロー。

<メッセージ>

作品の物語や内容を考える「構成」、そしてろう者を中心に「演出」をやらせていただくことになりました。

今回の作品は今までにない初めての試みになります。ろう者にとっての「オンガク(ろう者の音楽)」とはなんなのか、ろうコミュニティやろう者の今までの歴史の中で培ってきた身体や手話から自然に溢れるオンガクのようなものとはなんなのかを議論し、刺激を受けている日々です。また聴者とも意見を交わしていくことで、2つの世界の相違点、共通点などといった発見があり、音楽/オンガクの本質や人間について考えさせられています。

この作品が、人間の芸術をさらに発展していくための後押しになるのではないかと期待しています。聴者の世界とろう者の世界が共生するとはどういうことなのか。

ぜひみなさんに舞台をご覧いただき、一緒に考えていけたら嬉しく思います。



演出・出演

島地 保武 (しまじ やすたけ)

■プロフィール

2006~15年ザ・フォーサイズ・カンパニー(フランクフルト)に所属。2013年に酒井はなどのユニット「Altneu」を結成。資生堂第七次椿会メンバーに選出され、パフォーマンスに加えインスタレーション作品を展示。愛知県芸術劇場製作で環ROYと共作共演の『ありか』で国内外をツアー。フランス国立シャイヨー劇場のレジデンスプログラム(ファブリック・シャイヨー)に選ばれ滞在制作をし『Oto no e』を創作。谷桃子バレエ団、井上バレエ団、新国立劇場バレエ研修所、K-BALLET ACADEMYに振付。石井みどり、折田克子、佐多達枝、笠井叡、森山開次、串田和美、長塚圭史、中村蓉、マリーナ・マスカレルなどの作品に参加。衣装家ひびのごづえ、現代美術家さわかきとコラボレーションもしている。DaBYゲストアーティスト、K-BALLET ACADEMY ゲスト講師、MIHO BALLET SCHOOL 講師。

<メッセージ>

今回のプロジェクトは一言で言うと、かなり一筋縄ではいかないだろうと今から思っています。

自分にとって当たり前だったことがどんどん覆されていくような感じがして。それは怖いことですが、同時に楽しみでもあります。

僕はダンサーで、ダンスはコミュニケーションなので、そのコミュニケーションの幅が、どう変容していくのかに非常に興味があります。何よりもやはり人と人との関わり合いなので、ドキュメンタリーじゃないですけど、僕が接していくことによって、そのこと自体がストーリーになっていけば良いと考えています。

また出演と同時に演出もしていかなければいけないのですが、心がけていることは“嘘つかない”そして“無理をしない”ですね。我慢はしますが、しっかりお互い伝えられるという関係を築いていくのが、大事なかと。

この作品は舞台上でも更新されていくような、その場、その時のコミュニケーションというのが、見どころになるのではないかなと思います。そして、この作品をご覧になる方々にとっても、舞台を観て終わりではない、自分にとっても“よい作品ができた、やった、終わり。”ではない、次へのきっかけになるような作品になったら嬉しいです。



ドラマトウルク 雫境（だけい）

■プロフィール 聾（ろう）の舞踏家。

1996年～2001年日本ろう者劇団に在籍。1997年故鶴山欣也氏（舞踏工房 若衆・主宰）の誘いを受けて舞踏を始め国内および欧米、南米で活動する。2000年にユニット・グループ「雫」を旗揚げ、国内外で公演、ワークショップを展開。2013年アニエス・トゥルブレ（アニエスバー）監督の映画『わたしの名前は…』に出演。2016年牧原依里との共同監督映画『LISTEN リッスン』を制作。他に小野寺修二氏の演出や演劇、人形劇などの舞台にも出演。2019年新たに身体表現ユニットグループ「濃淡（NOUTAN）」を結成。<https://www.noutaninline.com>

<メッセージ>

私は、ドラマトウルクという演出家に助言やサポートをする役割を担います。

この作品で表現したいことですが、昔からろう者の手話には音楽のような動きがあります。それらは手話や手型、非言語的表現などで、時々見ることができます。そのような動きの中に、私たちは「オンガク（ろう者視点での音楽）」というものを感ずることができます。舞台上では「オンガク」をどのように表現し、広めていくことができるのかを考えたいと思っています。

今はろう者だけで集まって手話表現の中に見られるオンガク的な表現、舞台上での新しい表現とはどういうものがあるのかなど話しています。公演当日はオンガクと聴者の音楽の協働について、一緒に考え新しい表現をみんなに広めていけたらと思います。ぜひ劇場にお越しください。



ドラマトウルク 長島 確（ながしま かく）

■プロフィール

舞台字幕や上演台本の翻訳から劇場の仕事に関わり始め、やがて演出家や振付家の創作のパートナーであるドラマトウルクとしてさまざまな舞台芸術の現場に参加。劇場のアイデアやノウハウを劇場外に持ち出すことに興味をもち、アートプロジェクトにも積極的に取り組む。2018、20年フェスティバル/トーキーディレクター、その後23年まで東京芸術祭のディレクションに関わる。主なプロジェクトに「アトレウス家」シリーズ、「つくりかた研究所」、「←（やじるし）」、「まちと劇場の技技（わざわざ）交換所」など。訳書にベケット『いざ最悪の方へ』、『新訳ベケット戯曲全集』（監修・共訳）、フォッセ『ヨン・フォッセ1名前／スザナ／ぼくは風』（共訳）ほか。東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科 准教授。

<メッセージ>

ドラマトウルクというのは、いろんな立場の人が集団創作をしていく中で、いろいろ交通整理をしたり、文脈を作ったり、リサーチをしたりして、作っていくプロセスを助けていくような仕事です。

今回まさにそういう形で入っていますが、異言語、異文化のとても重要なコラボレーションだと理解しています。なので自分自身も今まで知らなかったこと、全然気がついてなかったことが山のように出てきていて、ものすごく勉強をしながらいろいろなことを進めています。考えさせられることも多く、その分アウトプットが全体として豊かになると思いますし、まだ今の時点で名前が出ていない方たちも含めて、とてもよいチームが出来上がりつつあるので、ぜひ楽しみにしてください。ゴチャッとしたすげいものができると思います。

■「TOKYO FORWARD 2025 文化プログラム」について

世界陸上・デフリンピックが東京で開催される2025年に、東京2020大会のレガシーを継承・発展させて展開する「多様な参加者とつどい・つながり・つくりあげる」3つのアートプロジェクト。

「まつり」をテーマとした「TOKYO わっしょい」、ろう者と聴者が遭遇する舞台作品「黙るな 動け呼吸しろ」、東京2020パラリンピック開会式のレガシーを受け継ぐ新作公演「TRAIN TRAIN TRAIN」を通じ、東京の持つ芸術文化の魅力を発信し、共生社会の実現に向けた歩みを進めるとともに、両大会を芸術文化を通じて盛り上げます。

<公式サイト>

https://www.seikatubunka.metro.tokyo.lg.jp/bunka/bunka_jigyo/2025artprogram.html

